

《シンポジウム参加者から寄せられた質問への回答》



L（レズビアン）当事者の方の回答



G（ゲイ）当事者の方の回答



F T M（心が男性、身体が女性）当事者の方の回答



M T F（心が女性、身体が男性）当事者の方の回答



助言者の回答

Q1 今までに苦労したこと、困ったことなどは？

中学校の時、自分のセクシュアリティを相談できる先生がいなかったし、情報もなかった。

交通事故で救急に運ばれた時、病状をパートナーに説明してほしかったのに、理解してもらえなくて、結局、親戚だと嘘をついた。

パートナーの親の介護が必要な時に、同性パートナーだと、会社から介護休暇がもらえなかった。

カミングアウト以前、近所の仲人大好きおばさんに結婚話を幾度となく持ち込まれたこと

<幼少期>

誰にも相談できないので、”自分とは何か”を小学生の時から考えていた。知識がないうちに、自分と向き合っていた時が、将来を想像できなかったので辛く、困っていました。

<現在>

社会的な性と身体的な性が違うので、カミングアウトしないと、集団でのお風呂や宿泊の際に不便です。

かといって、カミングアウトをすることもその後の私の印象に影響を及ぼす可能性があるので、慎重にならざるを得ません。

<家族の問題>

近くに甥や姪が住んでいた頃、学校で私の存在のことでいじめにあわないだろうかと思って、こちらも活動を自粛していた時があった。結果、彼らが地元ではなく遠方の中高一貫の進学校に入学してくれたのが幸いした。

<葬儀の時>

両親の時は喪主だったので着替えたり、髪を結う時間も化粧の時間もなかったので、結局男装のまま喪主を務めた。

(叔父の葬儀の時、父に「変な格好で来るな」と言われていたのがずっと心に残っている)

<更衣室>

普段はほとんどスカートをはいてるので、プールとか、男性用の風呂にはいらないといけないとき、周囲の奇異な目が気になる。

<仕事の中で>

まだ私たちの存在に理解のない15年ほど前、会社の営業の方に同行しなければならなくなり、「その時は男装で来てくれ」と言われた。

また、ラジオの公開生放送の時、スポンサーの担当者から、「あんなのがいたら、変なのが集まって来たら困る」と言われた。

Q2 現在、雇用の場面で、採用における基準点として診断書が必要になりますか？
セクシュアリティにかかわらず、個人のスキルを正當に評価される環境はあるのでしょうか？社会の全体の認識がまだ十分とは言えない中で、企業間で意識の共有がなされているのでしょうか？

LGBT当事者であるということと、個人の能力は関係ありません。なので、採用における基準点に診断書は必要ないと思います。ストレートだから限界がないとか、トランスジェンダーだから限界があるとか、そういう会社の見解はおかしいと思います。

今では、色々な企業がダイバーシティに関連する研修を進めているのか、広く社会の見解ととらえると、企業間の方が進んでいると思います。

具体的なことはわかりません。しかし、私の場合は診断証明書の提出を求められました。評価基準についてもわかりません。

ダイバーシティを推進している企業の中には、LGBTについても言及している所もありますが、社内の社員全員に周知されているか、理解があるかは別問題だと思います。まだまだ、個人の能力や、信頼が重要になるのではないかと思います。

21年前、コミュニティ放送局に珍しいタレントとして採用されました。取材力と構成力を買われ次の年も契約してくれました。またスポンサーを紹介したり、CMを制作したりしてそのうちディレクターにもなりました。最初は週に2回だったのが、3年後には3回、4年後からは毎日出勤するようになり、準社員の扱いになりました。社長の話だと、いろんな会合で、「お宅は懐の深い会社ですね」とよく言われたそうです。

診断書は不要だと思います。私たちは病気ではないと思っているからです。

まだ先進企業だけでしょうか、企業間での共有はないでしょう。そのうち雇用に関して消極的な会社は社会的な批判も受けるようになるかもしれません。

また、LGBT関連の産業は数億円規模だと言われているから、利益追求が本来の目的なら、雇用したほうが、商品や売り方、見せ方のアイデアなども得られやすくなるでしょう。

LGBTに理解のある企業も、徐々に増えては来ていますが、まだまだ、増えてもらいたいものです。

性同一性障害当事者の雇用の実態は、GID(性同一性障害)学会雑誌等で報告されていますので、ご関心がある場合は、GID(性同一性障害)学会までお問合せ下さい。

Q3 新聞社等マスコミの認識は？

新聞社はLGBTの問題について、解決すべき人権課題として積極的に取り上げようとしてくれていると思います。しかし、取り上げる話題が、性同一性障害に偏りがちなことには違和を感じています。

報道は、比較的、課題を取り上げてくれています。勿論、取材する記者さんの理解度や意識にも差がありますので、中には、間違った記事や誤解を受ける記事も見られます。インターネットや一部の報道の情報の中には、実際のデータではなく、個人的、あるいは、不適切な意見も見られます。

読者や視聴者には、情報源が適切なものかを確認したうえで、関心を持って見て・読んでみてもらうこと、さらにそれを基に自身自身で、あるいは、周りの人達と考えてみてもらうことが必要です。

Q4 ご自身がLGBTだと確信したきっかけは何ですか。また、その時の心情はどのようなものでしたか。

中学生で初めて彼女ができた時。どんなに愛し合っていたても、大人になっても、今の社会では結婚できないんだ、と絶望的だった。

同性を意識しだしたのは小学校低学年の頃で、自分で「何故、なぜ？」って感情が強かったように記憶しています。
相談するすべも無く、時間だけが過ぎ、気がつけば高校一年生の時、ふと立ち寄った本屋で手にした雑誌・・・「薔薇族」
凄い衝撃と共に、夢遊病者のごとく、その本を買ってました。
この時「あっ、自分一人じゃないんだ！自分はHOMO(今では差別用語)なんだ！」と気づきました。

幼少期から違和感がありました。しかし、それを言葉にするための知識を持ち合わせていなかったため、モヤモヤした時期を過ごしていました。
確信したきっかけは、インターネットで「性同一性障害掲示板」を見つけた時でした。同じような悩みを抱えている人が書き込んでいる内容を見て、確信しました。その時の心情は、“ホッとした。一人じゃなかったんだ”という感じでしたね。

小学校の4年生の時、男女が分かれた授業の時、男子だけのクラスで今までにない不安を感じた。最初の性的違和感。
6年生のころ、テレビのドキュメンタリー番組でゲイボーイ（今のニューハーフ）を初めて見たとき、あんな風になれたらいいなと思った。今でもそのシーンは覚えている。
100%確信したのは、18歳で男性と性的関係を持ったとき、私は女になりたいのだと思った。でも、それですっきりした。心の霧というか、もやもやしたものが晴れた感じだった。

Q5 人により様々なケース、スタイル、お気持ちなどがあると思いますが、現在、社会の中でどのようなライフスタイルを送っておられるのか聞きたい。
また、性別適合手術のメリット・デメリットについて知りたい。

私は、同性パートナーに子育て（私の子供3人）を手伝ってもらいながら、一緒に暮らしてきました。

子供が大人になって、今は別々に暮らしていますが、子供とパートナーとの関係は親子に準ずるものだと思っています。

現在は別々の住まい（私は母と娘と3人）、パートナーは実家で両親を看て、一人暮らしですが、また老後は一緒に暮らす予定です。

性別適合手術についてはリスクもあるので、よく考えてほしいと思います。

身体的な性は女性ですが、社会生活は男性です。

メリット・デメリットは個人差が有りますし、医学的なことは医師ではないのでわかりませんが、私が性別適合手術を行ったあとに感じたことは、「社会は見た目の性で人の大枠を判断する」ということでした。なので、ホルモン療法をしてからは、普段の生活で女性と思われるというストレスからは開放されました。しかし、身体的性は女性なので、女性特有の病気の検査（産婦人科）に行きづらくなったことなど不便も感じるようになりました。

悩み続けるより、一つでも悩みをなくするほうが、精神的にも、肉体的にもいいと思います。

私は決心してからは周囲を慣らしながら女性化していきました。20年前から女性として生きています。すぐにラジオの仕事がきて、パーソナリティー、ディレクター、プロデューサー、また新聞のライターなどをこなしながら、高松市の文化行事の役員にも任じられたりしています。

メリットは自分の能力を十二分に発揮できるようになったこと。レアな存在なので誰からも覚えてもらいやすいこと。友達が増えたこと。

デメリットは、子孫を残せないこと。

トランスジェンダーの人々のうちでも、医療的な対応を希望する性同一性障害当事者の中には、月経があるたびに自殺したいと思ったり、トイレで自分の体を見ることで、毎回、つらい思いをしたりする方もおられます。このため、ホルモン療法をしたり、手術をしたりして、身体の性を心の性に近づけたいと思うことは自然な気持ちです。

しかし、性別適合手術は、現在、保険の適用が認められておらず、高額な費用がかかります。このため、生活費をきりつめて貯金をしている方も多く見られます。また、手術をしたいけれど、手術に伴う後障害やそのための追加手術などを心配する方もいます。さらには、手術も怖いし、ホルモン療法で見た目が変われば、手術まではしなくてもと思う方もいます。

いろいろな選択肢を持つことができることが重要です。手術をしないと生きていけないと思う方が、良質の治療が受けられる施設が増え、保険適用で手術ができること、もし、手術を選択しなくても、法律や社会制度の中で不利益を受けないことなどの配慮が必要です。

Q6 今悩んでいる人（当事者）に対して、アドバイスするとしたら？

自分の家族や友人が性的マイノリティで悩んでいるときに、家族として、友人として、どのように接すればよいのでしょうか？

当事者の人には、「あなたは一人じゃないよ」と言いたい。
一人で悩まないで、誰かに相談してほしい。そして、セクシュアリティだけがアイデンティティじゃない。仕事や勉強をしっかりとがんばって、社会人として自立することが大切だと思います。

ご家族が悩まれているのであれば、そばにいて、普通に接してほしい。そのうち、本人が心を開いて話をするとおもいます。
カムアウトは本人の問題だと思うので。

君は一人ではない！
周りをちゃんと見て！

本人に話を聞いて、ひとりで悩まないようにすることが重要だと思います。

私はカミングアウトをすすめています。受け入れる場所と人は以前よりはるかに多いと思います。また、LGBの場合はパートナーと出会うきっかけも増えます。
趣味や嗜好の問題ではなく、生まれつきの脳の機能の問題なので、それを早く受け入れるべく努力をすることでしょう。

同じ家族なのだから悩みは共有できるはずですが、孫が欲しいとか、普通に結婚を迫るのは単なる家族のエゴです。

友人なら、性が変わって困るのは婚姻を望む人の場合くらいです。人間であることには変わりないと思います。

誰かに相談できれば、そこから、いろいろなことが起き始めます。しかし、告白するためには、話しかけやすい雰囲気、環境が必要です。すべての人々が、LGBTの問題に限らず、日常の中で差別や偏見を少なくしておく気持ちが重要です。

本人、あるいは、告白を受けた人が、まわりに相談できる人がいないと感じた時でも、経験を持って相談を受けてくれる専門家はいます。相談窓口をつくる自治体も増えてきています。

Q7 以前、ある当事者の方が「友人にカミングアウトしたときは何も変わらなかったが、家族へのカミングアウトは地獄の始まりだった」と話されていました。皆さんが、ありのままの自分を受け入れるまでの葛藤、ご家族が受け入れてくれるまでの困難はどのようなものでしたか？ 当事者のご家族に伝えたいことは？

友人や家族がカムアウトしたら、「あなたがどんな人であれ、あなたのことを愛している」と伝えてほしい。

LGBTについて、正しい知識を得ることが必要だと思います。

私は、まず母親にカムアウトしました。(中学生の時)

「あ、そうなん」「で？」と言われました。

子供達にもカムアウトしました。

「どんなお母さんでも、お母さんに変わりはない。お母さんが幸せならそれでいい」と言われました。

自分の場合、高校生時代の愛読書？バイブル？の「薔薇族」が家族に見つかり、「あんたを変態に育てたんじゃない！」と言われたこと。

まあ自分の場合、気が強く、負けん気が人一倍あったせいか、自殺等など考える暇なく過ごせたかな。

自分が強くなければ、それ以上に親は心配するんじゃないかな！

弟の会社の主催する講演会に、担当者だった弟から講師の依頼が来ました。講演が終わった後、弟が「マイ・シスターです」と参加者に言った言葉がうれしかったですね。それまでは弟同士が「街であっても知らないふりをするから」といつも言っていたのですから。

最初はラジオのタレントなので番組上、今日は女装で行かなければならないからとか、だましながら、家族に女性姿を慣らしてゆきました。21年も前のことです。ラジオだから本当は見えないのに・・・。

父は風呂上りに裸でいるといつも怒っていました。母とはお風呂で流しっこだができるまでになりました。着物やアクセサリーももらいました。男ばかりの子供だったので、一人くらいは女の子が欲しかったのかもしれない。